

The history of "Place"  
Make the Differences

# 物語を生む「場所」を キャンパスに創造しよう

空間を再構築し、土地本来の力を活かして、  
キャンパスの風景を「かけがえのない場所」に。  
きっとここから、何かワクワクすることが起きるはず。

## ケヤキのデッキ

02

After

2号館前の緑地は、駐輪場にする計画が持ち上がっていました。元は建物のエントランスだったものの、耐震改修で玄関の位置が変わったため中途半端な印象になっていたのです。

ここで目を引くのは、大きなケヤキの木。駐輪場になるとこれが切られてしまうこと、周辺に他の駐輪スペースがあることを踏まえて、西成教授はケヤキをシンボルツリーとするポケットパークを提案しました。「他の2カ所に比べると引き算の計画が難しい場所で、しっかり空間づくりを工夫する必要がありました」とのこと。

ケヤキの周囲は、たっぷりの木陰を天然の parasol に見立てたウッドデッキスペースに。少人数で落ち着けるテーブルや椅子の他に、2本の低いコンクリート壁がベンチの代わりにもなります。「ケヤキの魅力に初めて気づいた」という声だけでなく、建物や通り全体の雰囲気がすっきり明るく見える効果も生まれて、キャンパス風景そのものの印象を変えた好例となりました。

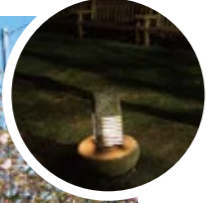
Before



After



Night Version /



Before



## 石あかりの小径

03

又信広場の整備と並行して「6号館南側の緑地の整備も」という声があり、現在の「石あかりの小径」の整備がスタートしました。西成教授は「又信広場のように人が集まってワイワイにぎわって...というよりも、ゆったり落ち着いた散歩スペースの方がふさわしいと感じました」と振り返ります。こちらもまた、土地の力を活かすリノベーションです。この緑地の魅力は、もともと植わっている「木々」そのもの。新し

く植樹はせず芝生で地面を覆い、一枚岩の花こう岩で200メートルほどの石畳の遊歩道を敷いて、8メートルごとに庵治石の石あかりを設置しました。それまでほとんど獣道だったグラウンドとポプラ並木の間も、石を敷いた通路として整備。春は八重桜に彩られ、ベンチに座って本を片手に過ごしたくなる、静かで心地良い時間が流れる空間が生まれています。

この3例は、いずれも「場所」をつくる試みです。  
コロナ禍では特に人のつながりが薄れ、孤独が社会問題となっています。人をつなぎ出来事を生む「場所」の力、空間デザインは、地域や大学の課題解決にも貢献できるはず。こうした場所づくりには今後も取り組みたいですね。

経済学部教授  
**西成 典久**  
にしなり のりひさ  
東京都中野区出身。専門は都市計画・まちづくり。「場所のデザイン」をテーマに建築、人文、経営の融合プロジェクトに取り組む。本業績で高松市美しいまちづくり賞(設計者)、屋島山上ちようちんカフェで観光庁長官賞受賞。東京工業大学工学部卒業。同大学院修了(工学博士)。



After



Before



## 又信広場

01

かつての幸町南キャンパス・講堂北側は、クロマツやサザンカが生い茂るうっそうとした緑地で、駐輪場として利用する学生以外はあまり人通りがありませんでした。2009年、工事に伴って一時的な駐車場としていたのを緑地に戻す際に「もっと緑地の方に人の流れを引き込めないか」と検討したのが、南キャンパスのリノベーション計画の始まりです。

大きなコンセプトは、「キャンパスに居心地のいい場所をつくり、学生や地域の人に愛着を持ってもらえる空間とする」。その第一歩となった又信広場の場合、重視したのは「今あるものを最大限活かして場所の力を解放する」イメージでした。余分なものを足さずに、引く・そぎ落とす空間デザインです。

埋もれていたクスノキを活かすために、クロマツは移植。緑に

「囲まれる」雰囲気をつくって、手前はテーブルや椅子を置いたくつろげるスペース、奥ははんなりとした築山のある庭園風の芝生としました。立て看板には地域の人も気軽に立ち寄りやすいポジティブなメッセージを掲載。駐輪場という「機能」のみが目立った空間が、さまざまな出来事起きる「場所」へと生まれ変わり、南西方向に見える峰山も借景として際立ちます。

2010年3月に竣工し、2011年度には高松市美しいまちづくり賞を受賞しました。「見た目だけでなく、学生のキャンパスライフにも影響を与えるものにしたかった。実際に『又信広場で一生の友達に会えた』といった学生のコメントも寄せられました」と、プロジェクトを主導した西成典久教授。今も思い思いに憩う学生たちの姿が絶えません。